

石巻市の中心部から二〇キロメートル以上離れ、北上川に隣接した大川小学校は、市中心部に近い門脇小学校とともに、二〇二二年の東日本大震災で甚大な物的・人的被害を受けた。二つの小学校の痛々しい校舎や施設は、石巻市震災遺構門脇小学校および石巻市震災遺構大川小学校として伝承されている。

震災遺構大川小学校の紹介パンフレットによると、高さ八・六メートルの津波が学校をのみこみ、児童七四名、教職員一〇名が犠牲になったという。宮城教育大学ウェブサイトによると、大津波警報発令と町の避難呼びかけがあるなかで、「五〇分間校庭にとどまり続けたこと、二次避難先を想定しておらずその場で議論を行ったこと、結果的に高い裏山ではなく『橋のたもと』の小高い場所』への避難を決めたこと」など多数の問題があったとされる。

私たちは、こうした大川小学校の不幸な経験から何を学べるか。大規模災害の被害を最小限にするための事前・事後の防災・減災に取り組むことの重要性



## 旧大川小学校の教訓

は言うまでもない。また、大きな危険が迫っていることを訴えるために、「今すぐ命を守る行動をとってください」というテレビでの呼びかけも重要だ。

問題は、命を守るために具体的にどうすればよいか、である。日頃から考えて準備せよ、というのでは後の祭りだ。

私は、テレビの呼びかけは、

「不確実性下の意思決定」に関する問題だと理解する。この場合の行動原理として、マキシマクスの（最良状態を想定したなかでの最良を選択）、マキシミン（最悪状態を想定したなかでの最良を選択）、ミニマクスの（後悔（レグレット）として各状態から最大の後悔を想定してその最小値を選択）などが考えられる。



渡り廊下の無残な姿



津波到達時を示す時計

キシミン基準に従って、最悪の状態を想定して最良の結果を導くということになる。どこかの教育課程でこうした考え方を学んでいたら、「橋のたもとの小高い場所」への避難は、最悪状態における最良として選択されることはなかったのではないだろうか。

## 谷口 洋志

中央大学名誉教授、政策研究フォーラム理事長